需給動向

国内の畜産物の需給動向

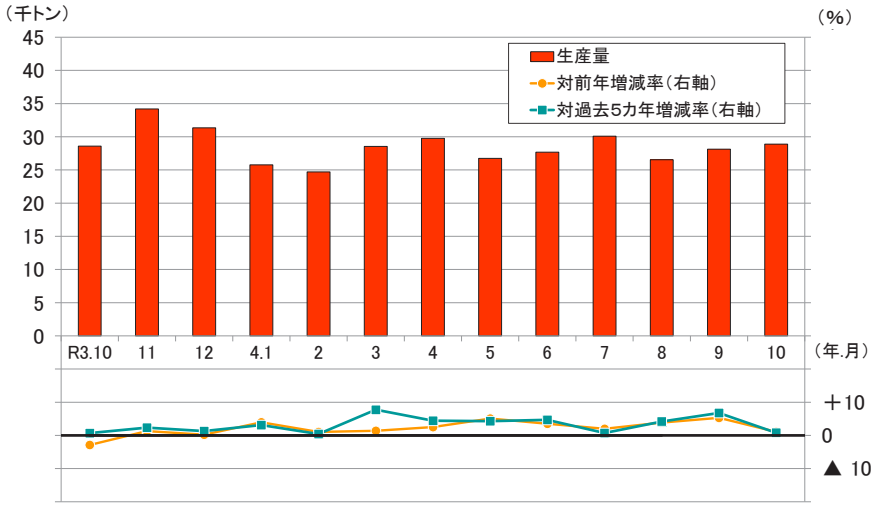
牛　肉

４年10月の牛肉生産量、前年同月比1.1%増

1　令和4年10月の牛肉生産量は、２万8890トン（前年同月比1.1%増）と前年同月をわずかに上回った（図１）。品種別では、和牛は１万3460トン（同0.2%増）と前年同月並み、交雑種は7917トン（同9.9%増）と前年同月をかなりの程度上回った一方、乳用種は7074トン（同5.5%減）と前年同月をやや下回った。

なお、過去5カ年の10月の平均生産量との比較では、0.8%増とわずかに上回る結果となった。

図１　牛肉生産量の推移

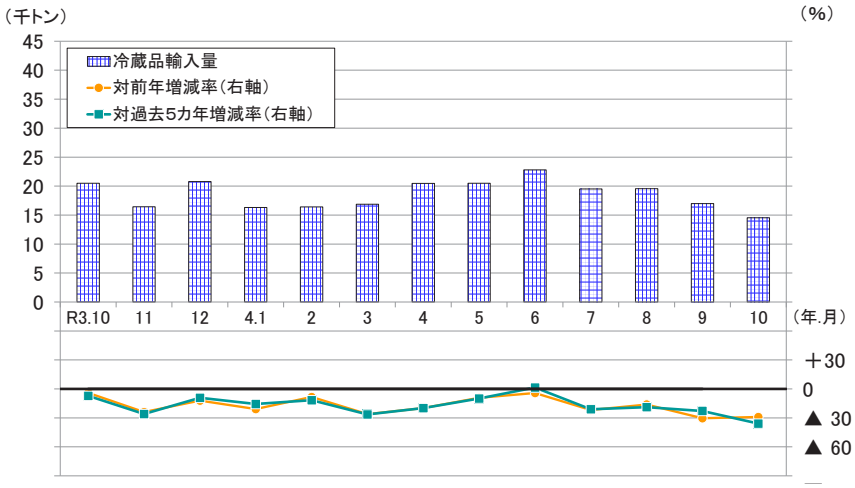


資料：農林水産省「食肉流通統計」
注：部分肉ベース。

2　10月の輸入量は、冷蔵品は、前月に続き、国内需要の低下や為替の影響により米国産や豪州産などの主要国を中心に全体的に減少し、1万4535トン（同29.1%減）と前年同月を大幅に下回った（図２）。また、冷凍品は、冷蔵品からの代替需要などがあり、近年の平均的な輸入量を上回る水準にあったものの、前年同月の豪州産の輸入量が入船の重なりで多かったことなどから、３万4057トン（同1.7%減）と前年同月をわずかに下回った（図３）。この結果、全体では４万8609トン（同11.9%減）と前年同月をかなり大きく下回った。

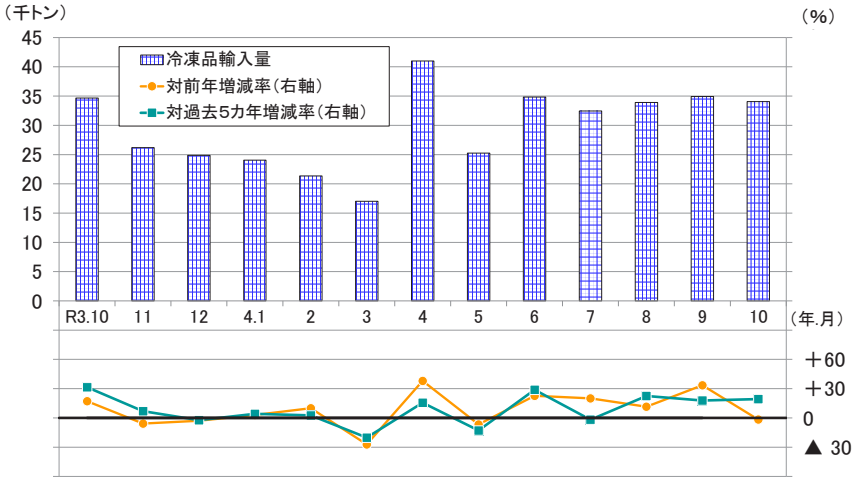
なお、過去５カ年の10月の平均輸入量との比較では、冷蔵品は35.9%減と大幅に下回った一方、冷凍品は19.3%増と大幅に上回る結果となった。

図２　冷蔵牛肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース。

図３　冷凍牛肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース。

３　10月の牛肉の家計消費量（全国1人当たり）は183グラム（同6.5%増）と前年同月をかなりの程度上回った（総務省「家計調査」）。前年同月比で14カ月ぶりに増加に転じた前月に続き、2カ月連続の増加となった。

なお、過去5カ年の10月の平均消費量との比較でも、2.0%増とわずかに上回る結果となった。

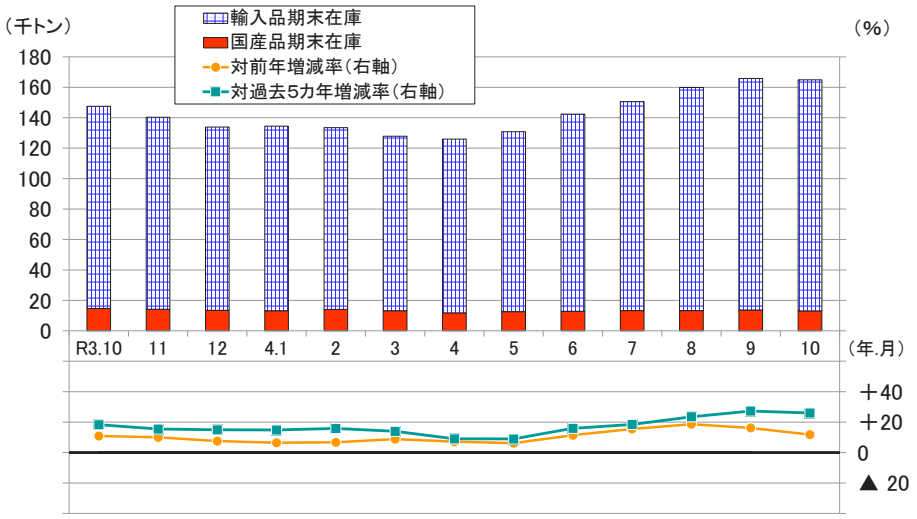
外食産業全体の売上高は、「全国旅行支援」や「水際対策の大幅緩和」が始まり、秋の訪れとともに全国で人の流れが活発化したことなどから、前年同月と比べ14.8%増とかなり大きく上回った（一般社団法人日本フードサービス協会「外食産業市場動向調査」）。このうち、食肉の取り扱いが多いとされる業態では、ハンバーガー店を含むファーストフードの洋風は、秋の定番メニューや新商品が好調であったことなどから、同10.8%増と前年同月をかなりの程度上回った。また、牛丼店を含むファーストフードの和風は、朝食の販

売促進とデリバリーの増加などから、同11.0%増と前年同月をかなり大きく上回った。ファミリーレストランの焼き肉は、客数の増加などから、同18.2%増と前年同月を大幅に上回った。

4　10月の推定期末在庫は、16万4947トン（同11.8%増）と前年同月をかなり大きく上回った（図４）。前月同月比で14カ月連続の増加となった。このうち、輸入品も15万1851トン（同14.2%増）と前年同月をかなり大きく上回った。

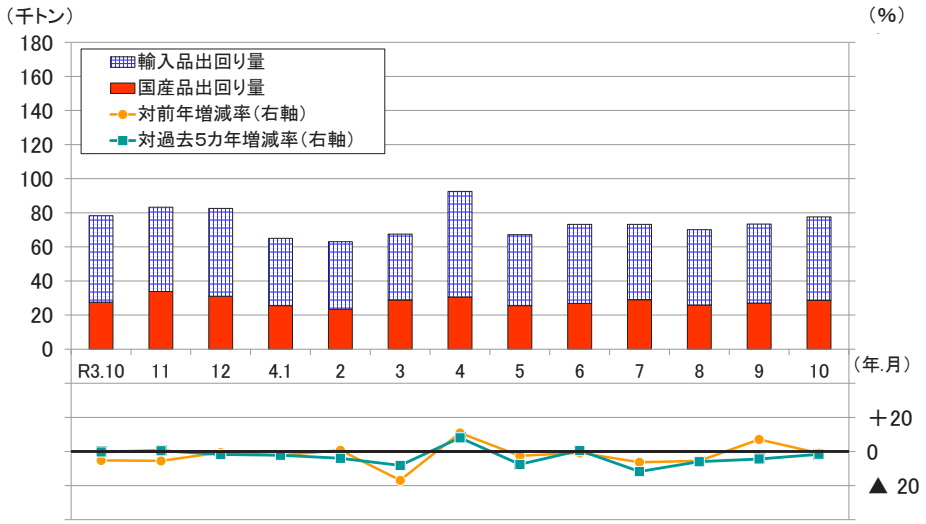
推定出回り量は、7万7560トン（同1.0%減）と前年同月をわずかに下回った（図5）。このうち、国産品は2万8596トン（同3.5%増）と前年同月をやや上回った一方、輸入品は4万8964トン（同3.5%減）と前年同月をやや下回った。

図４　牛肉期末在庫の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

図５　牛肉出回り量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

（畜産振興部　大内田　一弘）

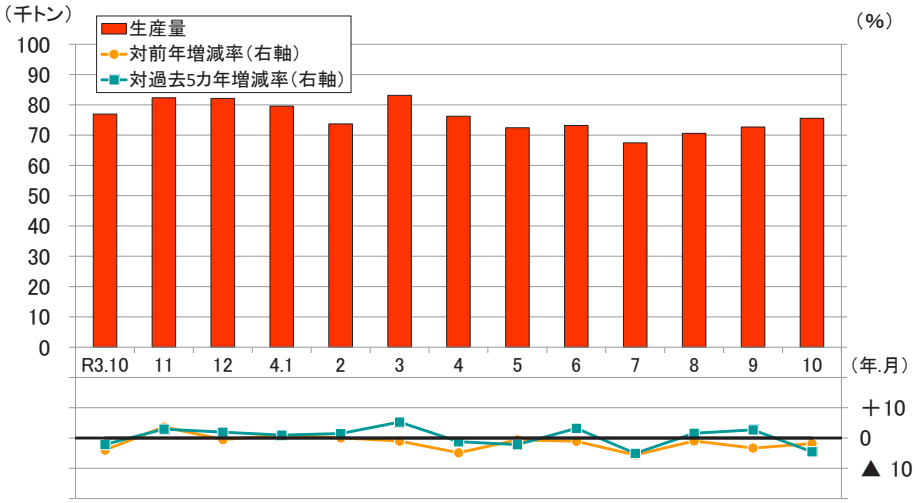
豚　肉

４年10月の豚肉生産量、前年同月比1.8%減

1　令和4年10月の豚肉生産量は、7万5562トン（前年同月比1.8%減）と前年同月をわずかに下回った（図1）。

なお、過去5カ年の10月の平均生産量との比較では、4.5%減とやや下回る結果となった。

図１　豚肉生産量の推移

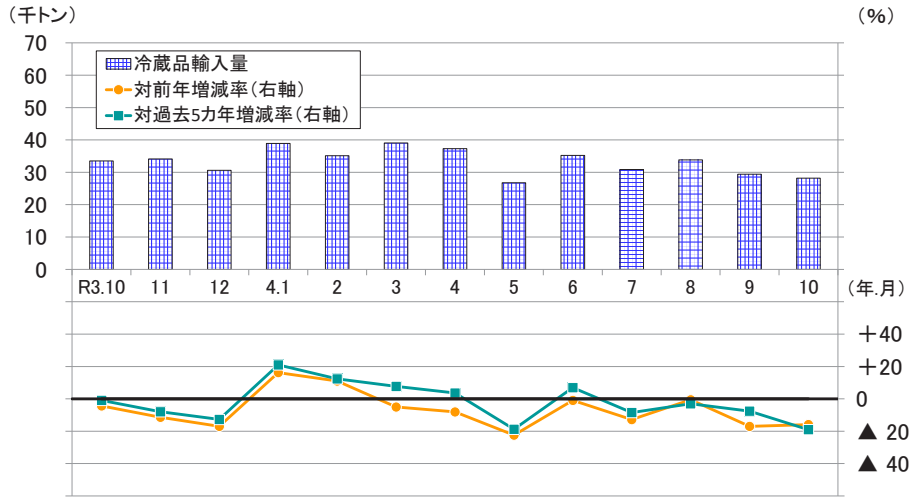


資料：農林水産省「食肉流通統計」
注：部分肉ベース。

2　10月の輸入量は、冷蔵品は、北米における現地価格の高止まりおよび為替相場の変動などから、２万8189トン（同15.9%減）と前年同月をかなり大きく下回った（図２）。一方、冷凍品は、新型コロナウィルス感染症（COVID-19）発生前の輸入量と比較すると少ない水準ではあるものの、北米の工場における慢性的なワーカー不足などにより前年の輸入量が少なかったことなどから、４万7548トン（同7.2%増）と前年同月をかなりの程度上回った（図３）。この結果、全体では7万5744トン（同2.7%減）と前年同月をわずかに下回った。

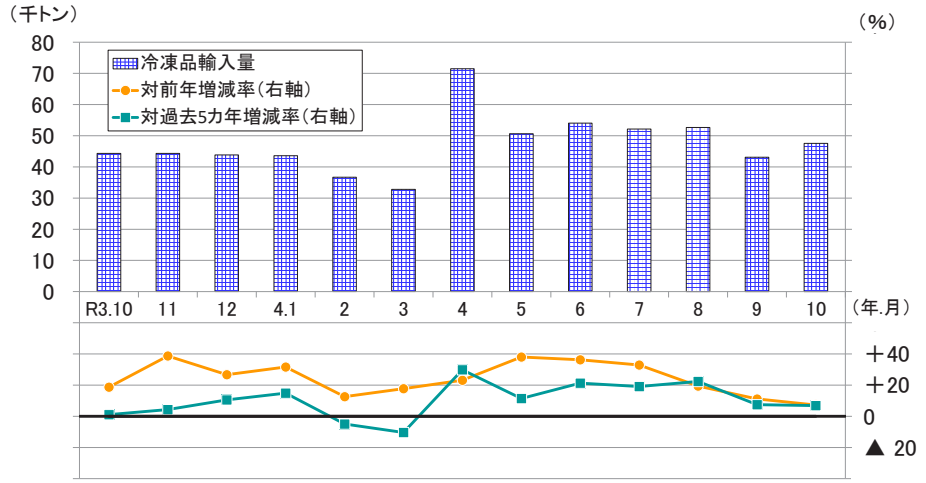
なお、過去５カ年の10月の平均輸入量との比較では、冷蔵品は19.1%減と大幅に下回る一方、冷凍品は輸入量が非常に少なかった一昨年の影響で５年間の平均数量が押し下げられていることから6.9%増とかなりの程度上回る結果となった。

図２　冷蔵豚肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース。

図３　冷凍豚肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース。

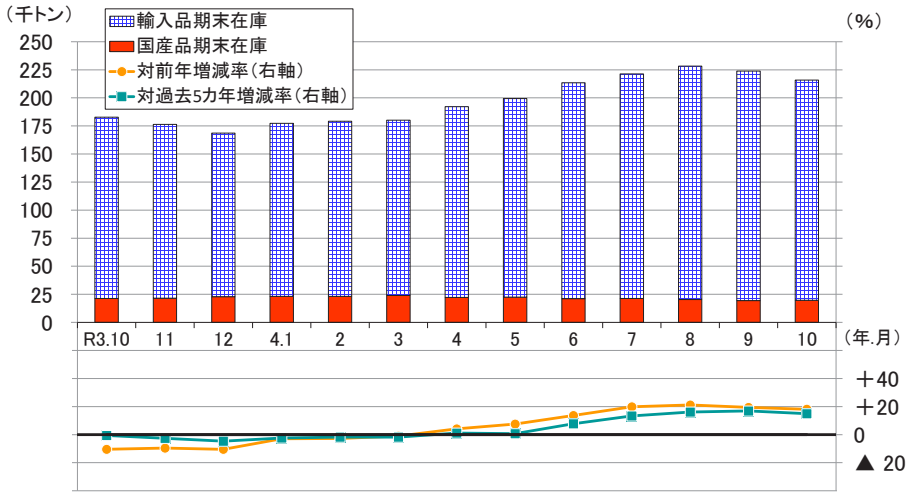
3　10月の豚肉の家計消費量（全国１人当たり）は、666グラム（同0.2%減）と前年同月並みとなった（総務省「家計調査」）。

なお、過去５カ年の10月の平均消費量との比較では、5.3%増とやや上回る結果となった。

4　10月の推定期末在庫は、21万5805トン（同18.1%増）と前年同月を大幅に上回った（図４）。このうち、輸入品は、19万6107トン（同21.5%増）と前年同月を大幅に上回った。

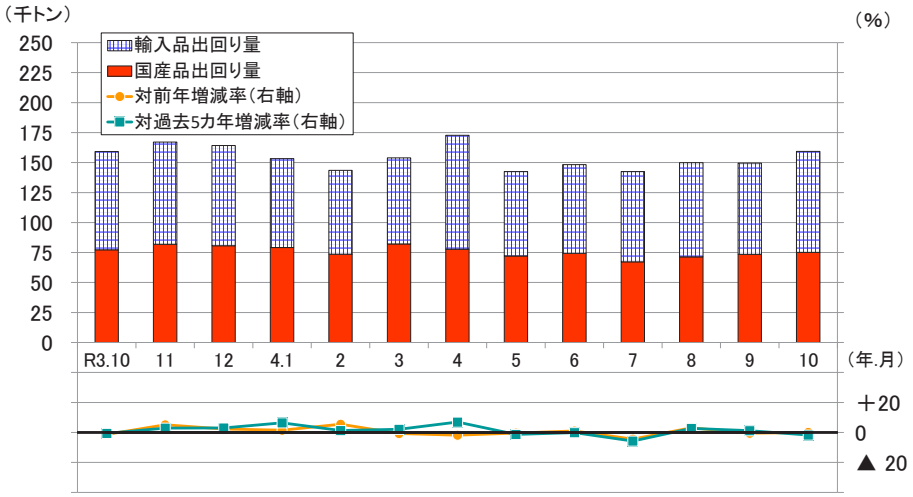
推定出回り量は、15万9256トン（同+0.0%増）と前年同月並みとなった（図5）。このうち、国産品は７万5147トン（同2.8%減）と前年同月をわずかに下回った一方、輸入品は８万4109トン（同2.7%増）と前年同月をわずかに上回った。

図４　豚肉期末在庫の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

図５　豚肉出回り量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

（畜産振興部　田中　美宇）

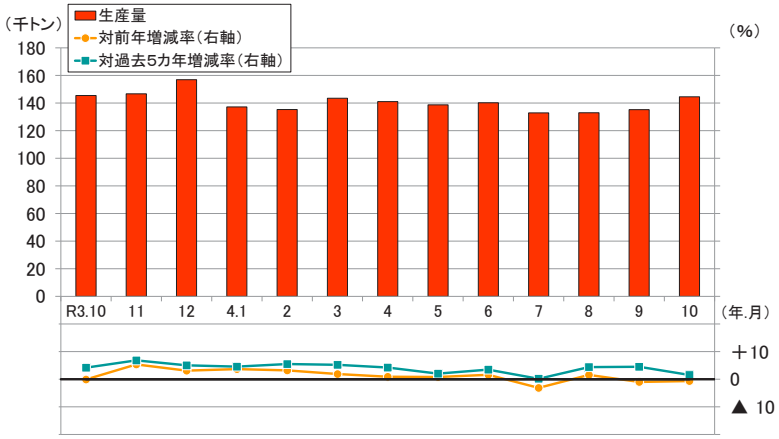
鶏　肉

４年10月の鶏肉生産量、前年同月比0.7%減

1　令和4年10月の鶏肉生産量は、14万4558トン（前年同月比0.7%減）と前年同月をわずかに下回った（図１）。

なお、過去５カ年の10月の平均生産量との比較では、1.5%増とわずかに上回った。

図１　鶏肉生産量の推移

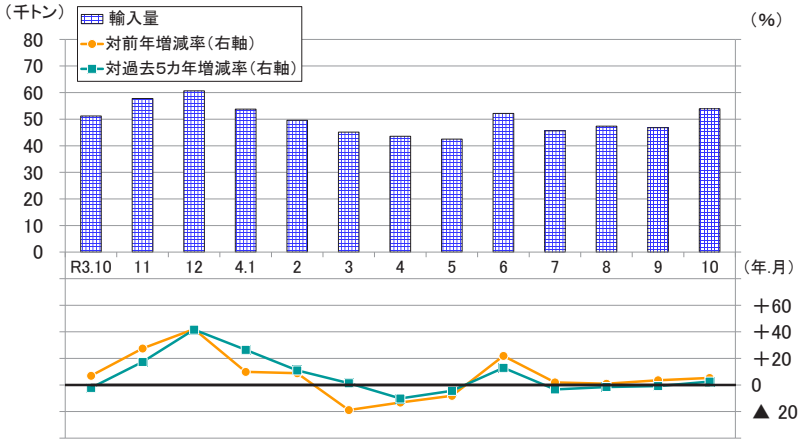


資料：農畜産業振興機構調べ
注１：骨付き肉ベース。
注２：成鶏肉を含む。

2　10月の輸入量は、例年、最需要期の冬場に向けた対応で増加する傾向にあり、加えて、前年同期にCOVID-19の影響を受けていたタイ産について、現地工場の生産性回復などにより日本向けの輸出量が増加したことなどから、５万3930トン（同5.3%増）と前年同月をやや上回った（図２）。

なお、過去５カ年の10月の平均輸入量との比較でも、2.5%増とわずかに上回る結果となった。

図２　鶏肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：鶏肉以外の家きん肉を含まない。

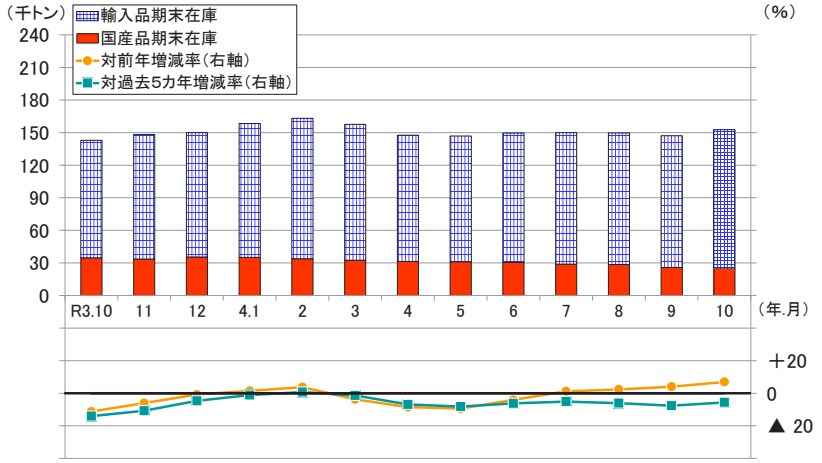
3　10月の鶏肉の家計消費量（全国1人当たり）は、541グラム（同1.7%増）と前年同月をわずかに上回った（総務省「家計調査」）。

なお、過去5カ年の10月の平均消費量との比較では、6.5%増とかなりの程度上回る結果となった。

4　10月の推定期末在庫は、15万2720トン（同6.9%増）と前年同月をかなりの程度上回った（図３）。このうち、輸入品は12万7502トン（同17.8%増）と前年同月を大幅に上回った。

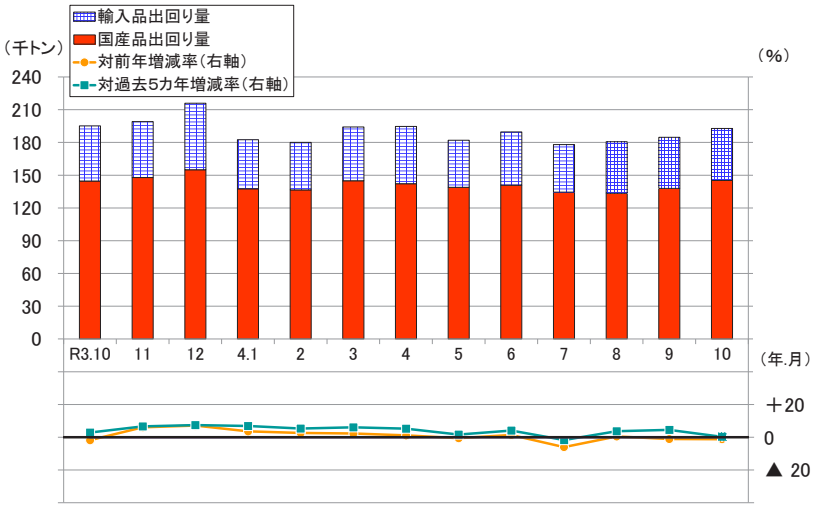
推定出回り量は、19万2829トン（同1.2%減）と前年同月をわずかに下回った（図４）。このうち、国産品は14万5184トン（同0.4%増）と前年同月をわずかに上回った一方、輸入品は4万7645トン（同5.8%減）と前年同月をやや下回った。

図３　鶏肉期末在庫の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

図４　鶏肉出回り量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

（畜産振興部　郡司　紗千代）

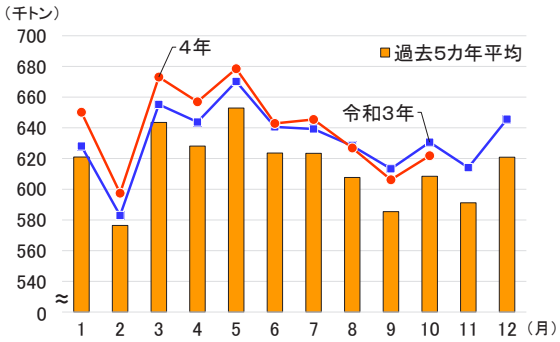
牛乳・乳製品

脱脂粉乳の10月末在庫量、３年６カ月ぶりに前年同月を下回る

４年10月の生乳生産量、前年同月比1.4%減

令和４年10月の生乳生産量は、62万1855トン（前年同月比1.4%減）と前年同月をわずかに下回り、３カ月連続で前年同月を下回った（図１）。地域別に見ると、北海道は35万3200トン（同1.5%減）、都府県は26万8679トン（同1.2%減）と、ともに前年同月をわずかに下回り、北海道は２カ月、都府県は３カ月連続で前年同月を下回った。これは生産抑制の効果などによるものとみられる。

図１　生乳生産量の推移



資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」

10月の生乳処理量を用途別に見ると、牛乳等向けは、34万8008トン（同0.7%減）と前年同月をわずかに下回った。このうち、業務用向けについては、３万716トン（同1.6%増）と前年同月をわずかに上回った。

乳製品向けは、26万9952トン（同2.2%減）と前年同月をわずかに下回った。これを品目別に見ると、クリーム向けは、６万4053トン（同2.7%増）と前年同月をわずかに上回る一方で、チーズ向けは、３万6657トン（同2.5%減）と６カ月ぶりに前年同月をわずかに下回った。脱脂粉乳・バター等向けは、12万3353トン（同5.0%減）と前年同月をやや下回った（農畜産業振興機構「交付対象事業者別の販売生乳数量等」）。

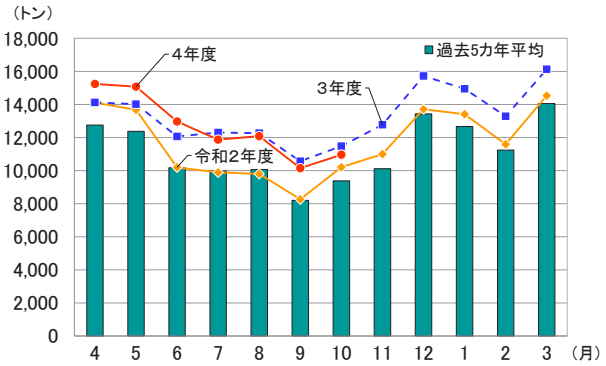
10月の牛乳などの生産量を見ると、飲用牛乳等のうち、牛乳は28万908キロリットルと前年同月並みとなり、成分調整牛乳は２万1382キロリットル（同2.8%減）と29カ月連続で前年同月を下回った。加工乳は、１万1831キロリットル（同14.0%増）と前年同月をかなり大きく上回った。乳飲料は、８万8806キロリットル（同2.7%減）と前年同月をわずかに下回り、はっ酵乳は、８万983キロリットル（同6.5%減）と前年同月をかなりの程度下回った。

乳製品向けのうち、クリームの生産量は、１万541トン（同2.1%増）と２カ月ぶりに前年同月を上回った。

脱脂粉乳の10月末在庫量、前年同月を3年6カ月ぶりに下回る

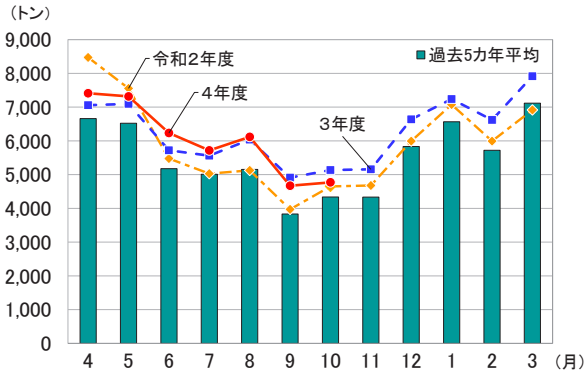
10月の脱脂粉乳の生産量は、１万963トン（同4.5%減）と前年同月をやや下回る一方で（図２）、出回り量は１万4362トン（同24.5%増）と前年同月を大幅に上回った（農畜産業振興機構調べ）。10月末の在庫量は、８万9447トン（同0.5%減）と在庫解消対策などにより、５カ月連続で前月

図２　脱脂粉乳の生産量の推移



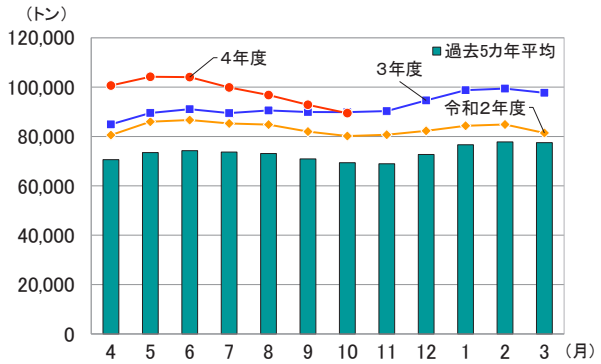
資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」

図４　バターの生産量の推移



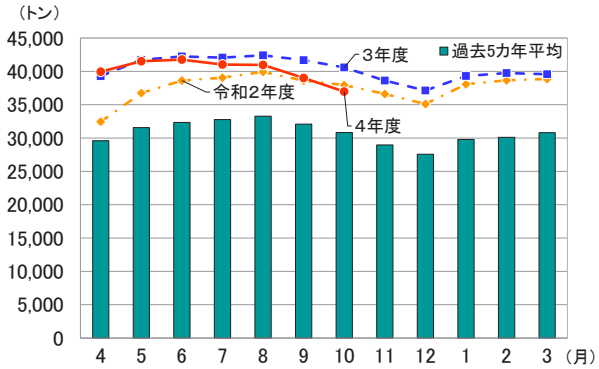
資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」

図３　脱脂粉乳の在庫量の推移



資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」

図５　バターの在庫量の推移



資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」

を下回り、３年６カ月ぶりに前年同月を下回った（図３）。

４年10月のバターの生産量、前年同月比7.1％減

10月のバターの生産量は、4770トン（前年同月比7.1％減）と前年同月をかなりの程度下回る一方で（図４）、出回り量は7214トン（同9.6％増）と前年同月をかなりの程度上回った（農畜産業振興機構調べ）。10月末の在庫量は、３万6969トン（同8.9％減）と６カ月連続で前年同月を下回り、２カ月連続で前月を下回った（図５）。

４年11月の牛乳販売個数、前年同期比2.0 ～ 2.5％減で推移

11月１日より生乳出荷価格が改訂され、牛乳等製品価格の値上げが行われた。一般社団法人Jミルクが12月１日に公表したJミルク需給短信（週報）によると、11月以降、牛乳類全体の販売個数は、前年同期比1.0 ～ 1.7％減で推移しており、11月末時点では大きな減少は見られない。品目別では、牛乳が同2.0 ～ 2.5％減で推移する一方で、乳飲料が同1.6 ～ 5.8％増で推移しており、牛乳より安価な乳飲料に一定程度シフトしているとみられる。

（酪農乳業部　山下　侑真）

鶏　卵

４年11月の鶏卵卸売価格、高水準で推移が続く

令和４年11月の鶏卵卸売価格（東京、M玉基準値）は、１キログラム当たり262円（前年同月比55円高）と、前年同月を大幅に上回った（図１）。なお、直近５カ年の同月価格の平均値と比較した場合の増加割合において、３カ月連続で最高値を記録している。

卸売価格は、例年、夏場の低需要期に底を迎え、年末の最需要期に向けて上昇する傾向がある。本年はCOVID-19の影響により減少していた業務用需要が、４年５月以降、回復傾向にあるところへ秋冬季の季節需要が加わり上昇傾向となっている。また、生産コスト高による減産傾向の影響も見られることから、同価格は例年より高い水準で推移している。

今後について、供給面では、生産コストの上昇により生産への影響が懸念されていることや、高病原性鳥インフルエンザ（以下「HPAI」という）の発生が多く確認されていることなどから、見通しが不透明な状況となっている。

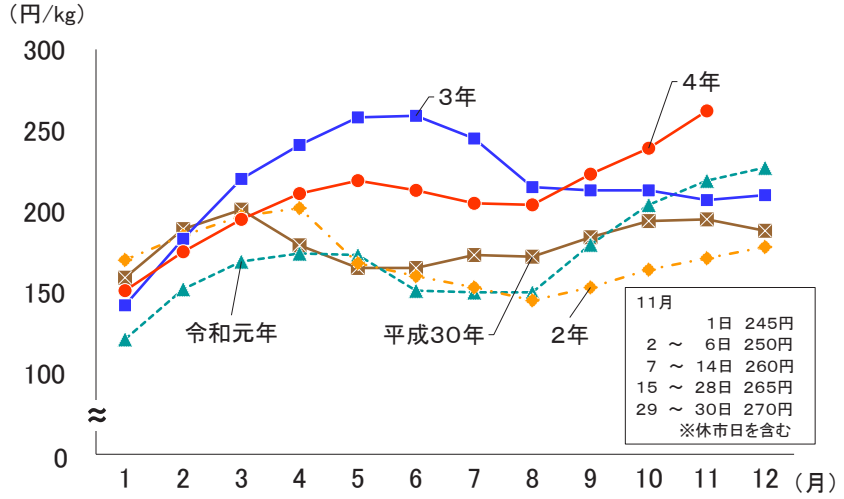
需要面は、鍋物やおでんなどテーブルエッグの季節需要の本格化に加え、全国旅行支援の継続実施やインバウンドによる業務用需要増加などによる消費の回復が期待される。

鶏卵小売価格、19カ月連続で前年同月を上回る

鶏卵の小売価格は、その消費量のほとんどが国内生産で賄われていることから、卸売価格の影響を受ける傾向がある。

鶏卵卸売価格（東京、M玉基準値）は、前年は、令和２年11月～３年３月にかけて発生したHPAIの影響により、特に夏場で大きく上昇したとともに、本年に入っても業務用

図１　鶏卵卸売価格（東京、M玉）の推移

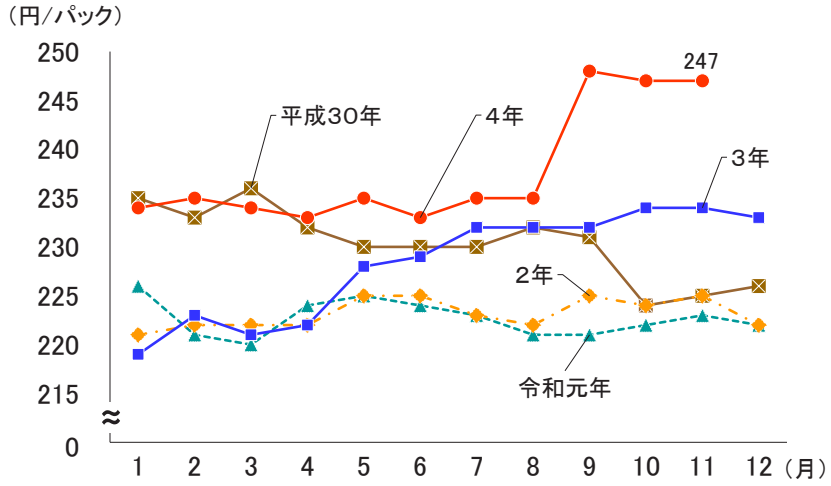


資料：JA全農たまご株式会社「相場情報」
注：消費税を含まない。

需要の回復や生産コストの上昇なども相まって平年に比べて高水準で推移しているところである。小売価格（東京都区部）の推移を見ても、11月は１パック当たり247円と前年同月比13円高となり、19カ月連続で前年同月を上回り、引き続き高い水準で推移している（図２）。

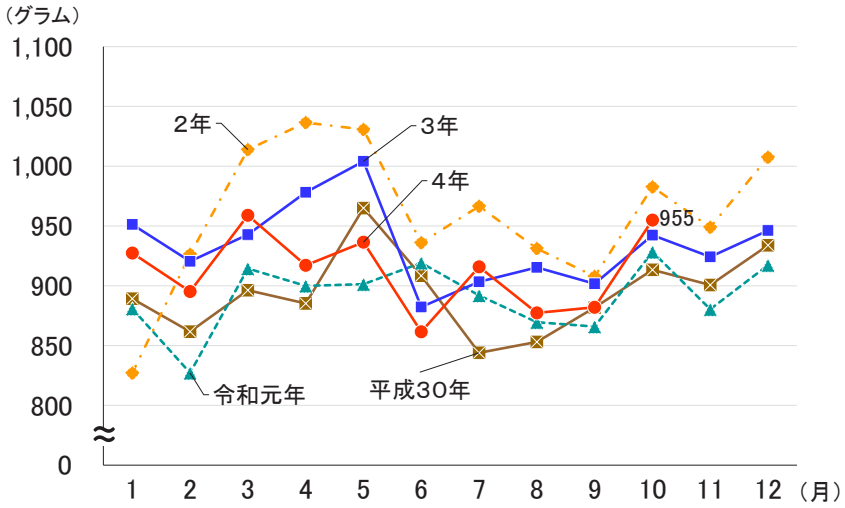
なお、このように小売価格が高い水準で推移する中、10月の鶏卵の家計消費量（全国１人当たり）は、955グラム（前年同月比1.4%増）と前年同月をわずかに上回っており、過去５カ年の平均購入数量と比べても2.1%増となっている（図３）。鶏卵の需要の根強さを表していると言えるものの、価格の推移次第では今後の消費量を注視していく必要がある。

図２　鶏卵小売価格の推移



資料：総務省「小売物価統計調査」
注１：消費税を含む。
注２：サイズ混合（卵重「MS52グラム～LL76グラム未満」、「MS52グラム～L70グラム未満」または「M58グラム～L70グラム未満」）。

図３　鶏卵の家計消費購入数量の推移（全国１人当たり）



資料：総務省「家計調査」

（畜産振興部　生駒　千賀子）